

情報元：南海日日新聞社
日 付：令和4年3月17日

#アオハルろう!!

徳高藏越
エイサー隊

徳之島の伝統文化「闘牛」を舞台上で表現するため共演する徳之島、沖永良部、鹿屋各高校の生徒たち＝2021年12月14日、奄美市名瀬の奄美文化センター



プロが指導、沖高ら共演

舞台上で闘牛、どう表現？

昨年12月、初めて奄美群島で開かれた県立文化連盟郷土芸能専門部発表大会（全国総合文化祭県予選）の公開稽古で、徳高蔵越エイサー隊がプロから演出指導を受けた。同隊の演舞テーマ「闘牛」を舞台上で表現するため、沖永良部高校など他校の生徒も共演。演者の声や動き、BGM（背景音楽）を組み合わせて、活気あふれる情景を編み出した。

大会は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で2年ぶりに開催。2023年の全国総文祭・郷土芸能部門が奄美市で開催されるため、リハーサルを兼ねて今大会も同市開催となりました。

伝承芸能、和太鼓の2部門に県内9校の生徒約90人が参加。群島からは奄美高校郷土芸能部、徳之島高校蔵越エイサー隊、沖永良部高校エイサー部の3校3団体が伝承芸能部門に挑戦。沖高エイサー部が部員最優秀賞に輝きました。

沖高エイサー部は「うむい（想い）しまんちゅの宝」と題し、沖永良部島の伝統舞踊を披露。獅子舞や正名ヤッコ、サイサイ節など琉球由来のエイサーを物語風に展開しました。

徳高蔵越エイサー隊は、島にまつわる歌謡曲2曲に合わせて和太鼓をたたき、演舞を披露。「煙（きらめき）」と題した演目の中心は、徳之島で約400年の歴史を持つ伝統文化「闘牛」。その勇壮さを表現しました。各校団体の発表後、県内外で活動する演出家・松永太郎氏が公開稽古を実施。徳高蔵越エイサー隊について「太鼓をたたきただけだと、単調で飽きられてしまう。もっと闘牛っぽい演出が欲しい」と指摘しました。

松永氏は、太鼓演奏を盛り立てるBGMの冒頭部分に注目。わずかに聞こえる「ワイドー、ワイ」という掛け声に、生徒たちは盛大な拍手を送りました。

指導を経て「躍動する牛に人々が沸く闘牛会場で、少しずつBGMが聞こえて出し、観客が勇壮に演舞し始める」という舞台構成に仕上がりました。稽古を最終する他校の生徒たちは盛大な拍手を送りました。

指導後、松永氏は「いかに観客を引き込むかが舞台演出の要。工夫次第でさまざまな見せ方ができる」と伝え、稽古を締めました。徳高蔵越エイサー隊の安田咲心部長は「もっと徳高らしさを表現したい」と気持ちを新たにしました。

さらに松永氏は、沖高エイサー部の太鼓演奏者と鹿屋高インターアクト部の演劇担当者で舞台上に招集。闘牛の情景をより明確に表現するため、沖高が発表に用いた獅子を牛に見立てて歩き回らせ、3校の演者たちに囲ませました。

指導を経て「躍動する牛に人々が沸く闘牛会場で、少しずつBGMが聞こえて出し、観客が勇壮に演舞し始める」という舞台構成に仕上がりました。稽古を最終する他校の生徒たちは盛大な拍手を送りました。

学校部活動を通じた伝統文化継承について、今大会の審査員は講評で「地域住民から直接教わり、舞台をつくり上げることを大切にしたい」と助言しました。今大会、群島内各高校の出演生徒は沖永良部20人、徳之島9人、奄美5人と、伝承芸能を盛大に演じられる人手はあります。少人数でも伝統芸能の空気感まで表現するにはどうすべきか。考えさせられる公開稽古となりました。